

徳永直の会会報

第62号

苦しい庶民の生活

高木陽助

四月から年金生活に入った。市民税、県民税、介護保険料等々支払っていくと、残ったわずかばかりのお金で生活しなければならぬ。老後は年金で悠々自適に楽しく過ごそうというのは夢のまた夢だった。しかし、それでも地方公務員だった私はまだ恵まれている。わずかな年金を頼りに生きる人々のことを思うと胸が痛む。この先さらに年金が減額され、物価が高騰したらどうなるだろう。

生活保護費は削減され、子どもたちの貧困率（四人世帯で二百五十万以下）は十五・七%であって、主な先進国の間でも悪い水準だという。総中流だと思っていれば、いつのまにか貧乏な国になっていたのである。というより一部の裕福な人々とそうでない多くの人々との二極に分化し、その格差が広がっているようだ。

徳永直は自分が村の子どもたちからいじめられる「最下層の貧乏人」であったと『戦争雑記』の中で述べている。辛く悲しく、そして恥ずかしい貧乏な生活を余儀なくされるが、彼よりももっと恵まれなかった『あまり者』の「兵さん」にも涙がこぼれる。貧乏人

目次

- ・ 苦しい庶民の生活 高木陽助：p1
- ・ 「眼をみはって」徳永直：p1
- ・ 徳永直「赤い恋」以上をめぐって、そして女性作家の場合
- ・ 谷口綱代：p4
- ・ 徳永直文学散歩⑦：p7
- ・ 平成二十五年総会報告：p8
- ・ 第36回「孟宗」写真：p11
- ・ お知らせ：p12

は好きで貧乏しているわけではない。社会構造がそうさせているのだ。

安倍首相は政権発足半年、経済を最優先し、「三本の矢の経済政策でプラス成長に反転させたい」としている。「アベノミクス」の金融緩和のもとで急激な円安が進行し、株価も乱高下している。自動車メーカーをはじめ輸出企業は黒字に転じているようだが、電気料金をはじめ原材料の高騰で苦しんでいる中小企業も多い。値上がりがラッシュの中で、非正規雇用の労働者が四割にもなっている。安弁が外された庶民は、いざというときいったいどうすればいいのか。

『眼をみはって』

徳永直

1 未来への眼

いまだきの若い女性は、それぞれの未来について、どう考えているのだろうか。私にも女学校を卒えたばかりの娘と、まだ二人の在学中と、三人の娘があるが、新聞など読んでも、映画評とか、強盗記事とかばかりで、政治的なものや、世界の動きについて、ほとんど関心がないようである。

いま日本が当面している民主主義革命についても、学校ではこれについて正しい知識を与えている風はなくて、私の知っているかぎりでは、同じ年頃の娘だとすると、かえって職場にいる、労働組合に組織された女性たちの方が熱心でもあり、身にしみて知ってるように思える。これは主として、私立が多い学校の方針と、職場にいる女性にくらべては、それほど社会とは直接でない、ところからくるものと思うが、一方では、戦後二年を経た今日では、またむかしの「あまやかした女学生気分」を(婦人雑誌などにもみられるような)つくりだしている社会風潮にもあるだろうと思う。

ほんとに年頃の娘たちをみると、この人たち、いったい自分の未来について、どう考えているだろうと思う。日本の産業は衰えて、その復興は、むかしの資本家的やり方ではほとんどのぞめないような世の中で、ここ五年や八年ではらちもあきそうにない。すこしばかりの学問と、主として家事など教えて、むかしながらの「良妻賢母」教育から、一と足もへだたっていない教育をうけて、でてくる世の中では、もうぬくぬくと「良妻賢母」ではおさまっていられない。食糧事情は、二三年うちには、買出しへゆかなくてすむくらいにおちつくとしても、国民の大半がおちこんでいる失業状態は、三年五年で解決の方途はつきそうもないし、夫のサラリーだけで「たのしいわが家」は、しよせんのぞめない。

そして不安なのは、どうして、そういう世の中になったのだろうか。と、彼女たちが考えないことである。戦争のためだとすれば、

—じゃ、
その戦争は何故おこったんだろう? という風には、疑問をなかなかもたないことである。また、そういう風には、娘たちの頭をはたらかせないように、学校、家庭、ジャアナリズムなどの、おさえる力もあるけれど、一ばん大きな力は、やはり彼女たちに、封建的な考え方が、もう遺伝的に、潜在的に巣くっているからだと思う。新憲法で、「家」は解体したけれど、新憲法でむかしの「嫁」はなくなつたけれど、彼女たちの頭には、昔ながらに存在している。アメリカ風に口紅をぬり、肩のはった洋服を着、脚も三センチくらいひたけれど、中味はあんがいそうでもない。まだほとんどが、「結婚」は「嫁」にゆくことと考えているし、「嫁」にゆくことが、彼女たちの最後の「ゴールイン」だとかんがえている。

2 見合い結婚の例

もちろん彼女たちも苦しんでいる。私の知っている東京の某女学校では、五年生の三割余が、この夏期休暇には労働者になった。一高の生徒九割余が、夏期休暇以外にも労働しているというのに比べると三分の一だが、家庭で、買出しで労働している彼女たちは、実際には男と負けない。列車のなかで、郊外の私鉄駅で、リュックをしょった彼女たちの、背をまげ足をふんばっている姿を、手をそえてやりたいほど、頼もしく思うが、それにも拘わらず、不満をかくすことは出来ない。

何故、もつと顔をあげないのか、視線をひろくして世の中をみないのか、この世の中をうごかしている社会の一員として、自覚し、責任をもち、主張しないのか、自分でわからないことに何故疑問をもたぬのか、何故でしょうと、若い女性の美しい眼をみはつて、声をだしてきかぬのか。やくざな流行歌にすぐ涙したり、宵の化粧ほどにもない底の知れたニヒリズムに深刻そうな顔つきをして、かみじんなことを忘れてしまうのか。

本当に、いまの若い女性の歴史的任務はたいへんだ。進駐軍の助力で、日本の民主主義革命はすすめられているけれど、この一ばんの主役は今日の若い女性だ、と私は思う。日本のばあい平和のうち、革命はすすめられる見とおしであるけれど、それは暴力を用いないだけで、封建性と血を流してたたかったフランス大革命と、同じ精神のたたかいである。そして若い女性が主役、というのは、封建遺制の最も大きな土台の一つ「日本の家庭」は、「女三従」をふみ台にして出来ているからで、若い今日の女性が、自分の母や姉と同じてつをふむか、それに抵抗するかによつてきまる、という意味からである。

先だつて、東京のある大会社に「恋愛と結婚」の問題を話にいつて、終わりに座談会になつてから、「見合結婚」の可否で、意見が続出した。百人ばかりの出席者中、三分の一くらいが若い娘さんであつたが、南方から復員したという廿四才の青年が、「見合」を支持したのち、こう云つた。「自分には若干の家作と両親がある。私はまず両親を大切にしてくれる配偶者をえらびたい。両親を大切にする人なら、きつと自分にもいい人にちがいない。すると果然右側の席から廿一だという事務員の娘さんが手をあげた―妻は見合に

反対でもないし、両親を大事にしてあげることに不賛成でもないですけれど、やっぱり当事者同志のことが、先決だと思えます」と、おこつたような赤い顔で云いきつた。同じ会社の人達だし、事柄だけに、拍手などはおこらない慎重な空気であつたが、廿一の娘の発言は、明らかに他の娘たちの支持を得ていて、男女が、はっきりと対立した瞬間の空気であつた。

「日本の家庭」は「男の家庭」でもあつた。若い今日の女性は、社会的にはまだまだだめくらにされておりながら、しかしからだのどつかでは、この歴史的時代を感じとつてもいる。捨身になつて飛躍しようという感じもあらわれていて、その身もだえがいたましくさえみえることもある。

そして女が「女三従」の封建制から脱出するには、観念だけでは出来ない。女が経済的に独立すること、社会的に男の職場にも進出することなしには不可能である。社会主義社会とか或はソ連のような社会制度に改革されねば、女性が真に解放されることは出来ないけれど、私たちはいたずらな空想は止めねばならぬ。この日本の現実、いま目前の民主主義革命を、どう立派にやりとげるか、それなしには一歩も前へはすすまない。今日の若い女性は、教師にむかつて、先輩や、両親や、政治家にむかつて、そぼくに、誠実に、美しい眼をつぶらにみはつて自分の疑問をきくことからはじめねばならぬ。―これは何故でしょうと。

(昭和二十三年一月一日発行 『紺青』第三卷第一号所収)

徳永直『赤い恋』以上をめぐって、 そして女性作家の場合

谷口 絹枝

二〇一三年二月の第三六回孟宗忌で、「徳永直『赤い恋』以上」——コロンタイの恋愛観に関わって」と題して発表させていただいた。「赤い恋」以上は、その発表時（『新潮』一九三一年一月）にかなり注目された作品だったが、今日では、あまり読まれる機会はないようである。

ロシアの女性革命家、アレキサンドラ・ミハイロヴナ・コロンタイ（一八七二年〜一九五二年）の恋愛観は、昭和初期の日本の言論界に新しい恋愛の形態をめぐってさまざまな議論を巻き起こし、「コロンタイズム」として左翼運動やプロレタリア文学にも少なからず影響を与えた。なかでも、コロンタイが革命時代の恋愛を描いた小説の三部作である『働き蜂の恋』（一九二三年）の邦訳が、『赤い恋』（松尾四郎訳、一九二七年一月）や『三代の恋』（当初『恋愛の道』の題名、林房雄訳、一九二八年四月）としてそれぞれ世界社から出版されると、短期間に版を重ねる勢いで読まれた。その論文集や小説からうかがえるコロンタイの恋愛観は、社会主義の立場から女性解放を掲げながら、とりわけ両性関係の問題が革命にとって重要だと考えるもので、人生に大きな意義をもたらす「偉大なる恋愛」（トルストイの言葉として引用）を賞賛する。女性の人生を旧来の男性に従属する恋愛や結婚制度による支配から解放し、社会的な生き方を可能にする社会変革の中でこそ「偉大なる恋愛」は成

長すると述べ、そこに至る過程に同志の間での男女の自由な結合を「僚友恋愛」として推奨した。

このようなコロンタイの恋愛観は社会主義女性解放論と一体のものであった点に意義があったにもかかわらず、女性の社会的な義務に生きる意義を主張するあまり、社会的に重要な仕事の前では恋愛は「私事」にすぎないと強調する（『赤い恋』序）側面を伴ったため、革命が決定的ではない日本にそのまま移植しようとする受容側の問題が生じることとなった。つまり、コロンタイの提示する恋愛観は、男女の自由結合に基づく性的無秩序がコミニニストの新しい性道徳であると曲解されて受けとめられたのである。「恋愛私事」説や自由に性欲を満たす「水一杯」論のもとに、曲解された「コロンタイズム」（あるいは小説の主人公の名前に由来する「ゲニヤイズム」）が流行した。「偉大なる恋愛」を理想とする恋愛観は、当時、神近市子の指摘にあるように、むしろ「伝統的であり且つ人道主義的」でさえあったのだが。

プロレタリア文学においては、片岡鉄兵の「愛情の問題」（『改造』一九三一年一月）を始めとする、吉村浩太郎「プロレタリアーの途」（戯曲、『ナツプ』三一年一月）、江馬修「きよ子の体験」（『ナツプ』三一年二月）、立野信之「四日間」（『中央公論』三一年五月）など、階級闘争における男女関係の問題を扱った男性作家による作品が、昭和六年に次々に登場する。しかし、そのほとんどが、階級闘争の必要のために個人的な感情を犠牲にすべきとして、男性活動家に献身するハウスキーパーや性的関係が一方的に女性活動家側に要求され、しかも女性がそれに対する苦悩を克服し、新たな闘争を決意することの正しさへと導かれる展開をとっている。そ

のため、中野重治、小宮山明敏、蔵原惟人らから運動の論理に基づいた図式的な人物像とその非芸術的な形象性を批判されることとなった。女性が性的対象として運動のための手段とされる女性蔑視について、当時の批評は、女性差別を構造的に正当化する性別役割の問題にまで目が届かなかつたが、「プロレタリア恋愛」小説をめぐる状況のなかで、徳永の『赤い恋』以上は、「階級的義務」と「個人的感情」との機械的な対立を免れた血の通った作品として高い評価を得ていたのである。

こうしたコロントイの恋愛観をめぐる歪曲された受容の問題について、私は、かつて拙稿「昭和初期におけるコロントイの恋愛観の受容」(『熊本の文学 第三』審美社、一九九六年三月)で詳しく論じたことがある。今回の五宗忌ではこの拙論をふまえ、いったい、徳永作品はコロントイの「赤い恋」をそのタイトル通りに超えるものかどうかを、コロントイの小説との比較をさらに深めながら探った。ここでは、当日、十分に展開できなかった、「よき同志である」とことと「よき夫婦である」ことの不一致を作品はどう止揚したか、という観点から徳永作品の意義と問題点を改めて考えてみる。そして、この観点に関連して同時期の女性作家が描く革命と恋愛について比較してみたい。

まず、タイトルに関わるコロントイの「赤い恋」の内容を簡単に確認しておこう。主人公のワツシリツサは編物女工出身の党の活動家である。同志の夫、ヴォロージヤはネツプマンの傾向を強め、しかもブルジョワの娘ニーナを愛するようになる。同志として夫婦として夫の背信にあつたワツシリツサは夫と別れ、再び共同住宅の仕事に生きる道を見いだす。その後、妊娠に気づくが共同保育所で子

どもを育てる希望を抱く。

『赤い恋』以上の矢崎一郎とカツは、地方の農民組合運動に携わる同志の夫婦で、幼い子供が二人ある。インテリ出身で闘争に疲れた一郎と、紡績女工出身で尖鋭的なカツとの間で、新労農党樹立をめぐる政治的立場の対立を決定的にしてしまい、カツは苦悩の末、ついに子供を連れて夫との離婚を選ぶ。語り手であるナツプ所属の小説家「鷺尾」が、両者の言い分を聞くという方法をとるのだが、これは作家である語り手の「私」が、友人として「母」とその娘「ゲニア」の双方と話し合い、新しい階級の真理はどちらにあるかと思いつぐらすコロントイの「三代の恋」の方法にヒントを得たと思われる。

『赤い恋』以上の同志的夫婦の矛盾は、夫が妻に同志として対等に役割を担うより夫唱婦隨の夫婦愛を期待するというものだ。語り手である「鷺尾」によって、思想と愛情の不一致の問題が前衛の男たちにも巣くう感情の「封建性」として抉り出される。鷺尾はカツの離婚の選択に肯定的で、人格的にも思想的にも自立した女性活動家の像に好意的な視線を向ける。この点で男性活動家に従属する女性活動家を肯定的に描いた他のプロレタリア恋愛小説とは異なり、コロントイの社会主義的な女性解放思想への正当な理解がうかがえるのである。もつとも、夫が賛同する新党樹立に対抗するカツの立場は、党の方針に従うナツプ作家・徳永の立場の表明ともいえよう。しかし問題は、夫と別れたカツが、彼との間に同志でもなく、同棲による性的関係の可能性を鷺尾に示唆する小説の結末にある。「都合では、矢崎と、また同棲するかもしれませんが。しかし、それ以上のものではありません」と語るカツに対し、語り手は「党の

分派として……重要な使命を負って、細君は彼女の云う『職場』へ帰っていった——と受ける。肯定・否定を明確に示さない語り手の態度は「三代の恋」の結びのスタイルに倣ったといえるが、まさにその曖昧さこそは恋愛の理想像に曖昧な作家・徳永の問題として読めてくる。

鷲尾が念頭においたコロンタイの「赤い恋」の場合、夫婦関係は革命の中で芽生えた非婚の形態であった。ワツシリツサは夫と離別後、同志でも夫婦でもなく、男女の関係は解消するが友人関係として続くだろうと述べる。恋愛そのものをライトモチーフとする「赤い恋」には、思想的にも夫婦としても信頼をなくしていく夫婦を牽引する性愛の力について正面から描かれる。夫と別れた後、カツ同様に恋愛によらない人生の選択はあっても、カツのような愛情によらない性的な自由結合への飛躍は生じない。「赤い恋」はあくまで恋愛の人生に及ぼす作用をみつめ、恋愛に支配されない社会的な生き方を新しい時代の女性像として提示する。それに対して、『赤い恋』以上』では語り手とカツによって夫婦関係が「古い伝統の、感情のカス」と捉えられるように、恋愛の意義とその陥穽については追求されず、夫婦の性愛の問題が未解決のまま宙づりにされてしまふために、いわば形態だけが先走りした「自由結合」となっているのである。つまり、コロンタイが社会変革を伴うビジョンとして「恋愛」の理想を持っていたのに対し、徳永はついに恋愛についての理想像は掲げるに至らなかったという違いが明らかになる。子どもを抱えたカツの生活も見通せず、このきわめて観念的な結びが「赤い恋」を超えたとは、とうてい言えない。

徳永作品は「同志」と「夫婦」との不一致の問題に関連して、コ

ロンタイの社会主義的女性解放思想に理解を示したにもかかわらず、歪曲されたコロンタイズムの流行に準ずる結末を導いてしまった。この事実は、プロレタリア文学の男性作家に共通する何らかの傾向を映しだすものだろうか。

男性視点の偏向については拙稿に対し、秋山洋子氏が『赤い恋』の衝撃——コロンタイの受容と誤解』（池田浩士編『文学史を読みかえる・2』所収、インパクト出版、一九九八年一月）のなかで問いを投げかけている。秋山氏は作品の具体的な分析には至っていないものの、革命と恋愛が男性作家の目を通して語られる限界を言い、プロレタリア文学に参加した女性作家たちこそが女にとつての革命と恋愛を語ることができると示唆する。同時期の女性作家が描いた革命と男女関係について、現段階での調査の一部を報告してみたい。

文学作品において歪曲されたコロンタイズムの導入に先鞭をつけたのは、同伴者作家と評された野上弥生子の「真知子」（『改造』一九二八年八月—一九三〇年十二月）であろう。同志と夫婦との矛盾した関係では、平林たい子の「プロレタリアの女」（『改造』一九三二年一月）が、男女の性役割を逆転させる発想から「赤い恋」に挑戦していて興味深い。つまり、女が意志の異なった男と別れる時代は古く、「女の力」によって男の意志を変えさせるべきだという。しかしなお、同志的夫婦の抱える性役割に基づく愛情の問題を掘り下げた作品の登場は、転向の時代を背景に夫婦関係の危機を描いた佐多稲子の『くれない』（一九三六年—一九三八年）を待たねばならない。

プロレタリア文学の女性作家は、前掲作品もそうだが、女性に対する「階級」と「性」の二重の抑圧を女性に固有の身体性と結びつ

けて描く傾向がある。(このテーマについては、拙稿「無産階級者というアイデンティティと女性身体」『国文学 解釈と鑑賞』二〇一〇年四月号を参照)。たとえば松田解子の「産む」(『読売新聞』一九二八年六月四日)、同「乳を売る」(『女人藝術』一九二九年三月)、あるいは平林たい子の「施療室にて」(『文芸戦線』一九二七年九月)、同「夜風」(『新潮』一九二八年三月)、さらに佐多稲子の「煙草工女」(『戦旗』一九二九年二月)、宮本百合子の「乳房」(『中央公論』一九三五年四月)などは、妊娠、出産、授乳にまつわる女性身体を描出した小説である。いずれも無産階級女性の出産を、歯止めなく女性の性を収奪する国家・資本の権力、時に男性権力に対峙する関係図の中で描いている。

そして「プロレタリア恋愛」小説と同時期に発表された佐多稲子の「別れ」(『週刊朝日』一九三一年一月)では、夫の非合法活動を助けるために中絶を要請され、妻が「よき同伴者」たらんとしてその犠牲を受け容れる。だが、小説は、手術の苦痛に身をもたえる妻が、「強いられた犠牲のために身をもたえている」赤ん坊に呼びかけ、染みだしてきた乳にすすり泣く姿で結ばれる。夫婦の深い愛情を描く一方で、否定された身体としての母性が「苦痛を憎しみへ変え」、鬭争を新たに決意する糸口を見いだせないまま小説は閉じられている。「革命的ヒロイズム」(北田幸恵)に同調しかねない側面を引きずりながら、男性中心主義の運動の論理を承認しがたい女性身体を経験を描いたものと読むことができる。

おしなべて女性作家は階級運動の女性活動家を描くにあたって、妊娠と出産、授乳という女性の身体を経験をそのアイデンティティの根拠にしており、そこに男性作家との際立った違いをみる事が

できる。男性作家のプロレタリア小説にみられた革命運動の男性優位主義は、女性を性の対象とするが、女性身体を経験については語りの対象にしてこなかった。高い評価を得た『赤い恋』以上が恋愛(夫婦関係)の理想像を描き出せなかった要因に、性をめぐる女性身体を経験を思想化する視点を持たなかったことが関わっているのではないだろうか。

※『赤い恋』以上の本文は、新日本出版社版『日本プロレタリア文学集24』の『徳永直集1』に拠る。

徳永直文学散歩⑦

緒方 宏章

『あまり者』

郷里の家に少しばかりの金を、送金したその受取りの返事を、今朝(工場の休みを)まだ寝床にいた私の枕許へ、台所にいた妻が持ってきた。

郷里を出て、モウまる三年というもの、私と郷里の消息は、いつも、この月々の僅かの仕送りの返事に附け足されたものに依って知ることが出来た。

その消息から推して、私は、私の幼い時分の故郷が、山と、田圃と、小さな町と、川とに彩られた、嘗て田山花袋氏の全国行脚集に、日本で一等「田舎らしい田舎」と言われた、私の故郷が、だん

だんに都会化しつつあることを想像させていた。

××山のつっぺんに、上水道の貯水池が造られ、××谷の清流に発電所が出来、二作に、間作まで稔る××の田圃が開拓され、電車が通い始めたということなど……

「兄さん、私は車掌の試験を受けて合格しました。明日から乗務することになりました……」

家からの手紙を凡て代筆する弟から、この消息を受け取ったのは此の前の手紙であった。

彼処の森を伐ったというから、電車は、あの池の上辺を通っているだろう。そうすれば××町のあたりは軒並も多少変わっただろうし、にぎやかにもなつたろう……あの池も、この前のように、あんな沢山の鮒や鯉はいなくなつたかも知れない……ひよつとすれば、多少埋立てたかも知れない？……等と、私は想像をめぐらしていた。

そして、今朝の手紙に、また、多少の想像が、証拠だてられるような、変化を消息されているだろうと思ひながら、私は寝床に腹這いながら、封を切つて読んでみた。

しかし、そんな風物の移り変わりに就いては、今度の手紙は何も知らさなかつた。ただいつもの通りの送金受取りの簡単な札と、次のようなことが記してあつた。

「……兄さんは、市川兵五郎さんを御承知でしょう、あの魚獲りの名人、あの人がね、七日に死なれました。まだ三十五だった相です……」

「市川兵五郎？」と一寸私は、私の記憶を探した。そしてすぐ思ひだした。

「徳永直文学選集」より

直は、田山花袋が「田舎らしい田舎」と言つた熊本が、だんだんと都会化されていく様子を記しているが、現在の熊本市黒髪周辺は、直も想像がつかないような変容を遂げている。

それでも、記念碑のある立田山は、今でも市民の憩いの場としての自然を残している。

「市川兵五郎(兵さん)」は、どこをどう歩いて芋を掘つたのであろうか。

平成二十四年度「徳永直の会」

総会報告

- 一、期日：二〇一三年六月十五日(土)午後二時三〇分
- 二、会場：熊本市市民会館崇城大学市民ホール小会議室
- 三、映画鑑賞

題名・・・「ひとりっ子」

DVD・・・お蔵入りドラマ反骨の再生

五十年ぶりOBが自主上映、



立田山配水池 (記念碑より上る)

四、議事

1 会長挨拶

2 二〇一二年年度事業報告

二月十二日(日)：第三十五回 孟宗忌

① 碑前祭・徳永直文学碑前にて：献酒、献花、経過報告

② 作品朗読：熊大文学部講義室にて

「ある特派員」：熊本朗読研究会

③ 講演「朝鮮作家張赫宙をめぐる徳永直と神保光太郎」

講師 佐賀大学教授 浦田 義和氏

三月二十四日(土)：「会報60号」(記念特集号) 原稿依頼

テーマ「再考―徳永直文学」

五月十九日(土)：

二〇一二年(平成24年)度徳永直の会総会

於崇城大学市民ホール 中会議室

① 『先遣隊』の時代背景について(日本の満州政策)

講師 高木陽助

② 総会

* その後、熊本朗読研究会主宰の「朗読の夕べ」

に参加(中村青史先生の朗読もありました)

六月〜七月：「会報60号」(記念特集号) 編集・校正作業

十一名からの寄稿があった。

「会報60号」完成。会員への発送。

七月〜十一月：読書感想文募集・選考

応募作品なし。

十二月〜一月：「会報61号」の編集会議、作成作業。

編集会議。編集、校正

「会報61号」完成。会員への発送。

二月十日(日)：没後五十五年、第36回「孟宗忌」

① 碑前祭

② 作品朗読、「赤い恋」以上

② 講話：熊本大学非常勤講師 谷口絹枝氏

三月〜五月：総会準備。

3 二〇一二年年度会計報告

4 二〇一三年度役員案について

・会長 高木陽助(元公立高校教諭)

・事務局長 緒方宏章(熊本西高校教諭)

・広報 永田満徳(元公立高校教諭)

・会計 荒木恵(天草高校教諭)

・会計監査 山村淳子(上天草高校教諭)

田中耕二(東稜高校教諭)

・評議委員 鎌田吉豊(「べれそつそ」代表)

廣島 正(熊本出版文化会館代表取締役)

寺澤孝子(暮らしのわかば会代表)

・顧問 中村青史(前会長・元熊本大学教授・文学博士)

5 二〇一三年度事業計画案について

四月・五月：総会準備

六月十五日(土)：二〇一三年度徳永直の会総会

於：熊本市市民会館崇城大学市民ホール

六月〜八月：「会報62号」作成、編集会議。

8

閉会

- ①文学散歩（黒髪町界限）十月？
 ②大逆事件関連
 ③「意見・」要望

- カ その他
 オ 会員募集について
 エ 「ホームページ」の活用について
 ヲ 会員募集について
 ウ 「会報」発行について
 イ 読書感想文募集について
 ア 特定非営利活動（NPO）法人「くまもと文化振興会」報告

- 7 その他
 6 二〇一三年度予算案について
 二月：整理・諸準備。

神前祭、講演、朗読会。

- 二月十五日（土）：「第37回孟宗忌」
 一月（中旬）：「会報63号」発行。会員へ発送。
 十二月：「会報63号」編集、作成
 十一月：読書感想文選考
 十月三十日（水）：読書感想文応募締切
 九月：第二回読書会
 八月：第一回読書会
 「会報62号」発行予定。
 読書感想文募集（小、中、高生・一般対象）

2012年度会計報告

収 入		支 出	
繰越金	109,159	事務費	13,220
会費(43人)	86,000	通信費	24,690
利子	32	総会関連費	8,647
寄付	72,000	神前祭関連費	22,491
映画券売上	4,000	会報印刷費	111,300
		読書感想文関連費	0
		熊本文化振興会関連	20,000
		HP関連費	2,510
		映画賛助金	10,000
収入合計	271,191	支出合計	212,868
		残 金	58,333

以上の通り間違いありません。

2013年5月6日

会計 荒木 恵

2013年度予算案			
収 入		支 出	
繰越金	58,333	事務費	24,000
会費(43人)	86,000	通信費	20,000
雑収入	667	総会関連費	10,000
		碑前祭関連費	20,000
		会報関連費	32,000
		読書感想文関連費	5,000
		熊本文化振興会関連費	20,000
		HP関連費	2,600
		その他	11,400
収入合計	145,000	支出合計	145,000

* 年会費(2,000円)の納入をお願いします。

替用紙を同封いたしましたので、ご活用ください。

* 住所変更等がありましたら、下記までご連絡ください。

〒862-0955 熊本市中央区神水本町6-40 緒方 宏章

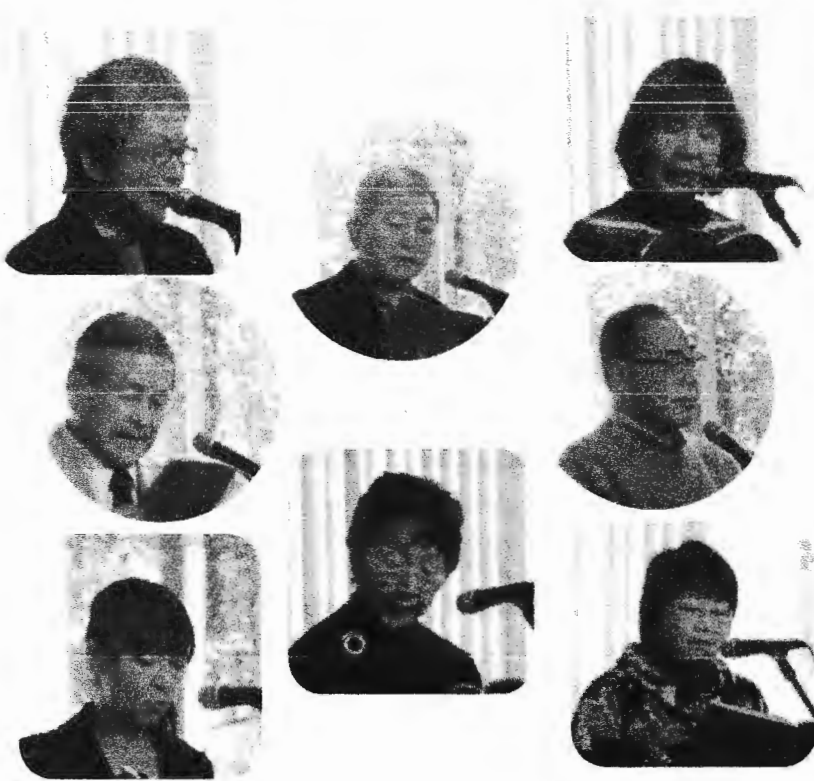


碑前祭に参加した方々(記念碑前にて)

第36回「孟宗忌」写真
平成二十三年二月十日

「赤い恋」以上」を朗読された

熊本朗読研究会の皆様



お知らせ

① 会員募集について

会員を募集しています。お知り合いの方に、入会のお誘いをお願いします。また会員募集のためのアイデアがありましたら、お寄せください。

振り込み方法につきましては、「徳永直のホームページ」に掲載されていますのでご活用ください。

② 「徳永直」ホームページのご案内

「徳永直のホームページ」を開設しています。「徳永直の会」の内容や過去の会報一号から三〇号まで掲載しています。「徳永直の会」で検索してください。

また、二月十七日にカウンターを設置しました。「徳永直のホームページ」にアクセスされた人数をカウントしています。すでに五百人を超えました。多くの方に御覧いただけたら幸いです。

① 「赤い恋」以上」の朗読CDの販売について

熊本朗読研究会の皆様が朗読されたCD(二枚組)を、販売します。
一、六〇〇円(送料込み)

詳細は、HPにてご確認ください。

④ 会報発行の遅れのお詫び

「徳永直の会会報」62号の発行が、諸般の事情により遅れましたことをお詫び申し上げます。

今後ともよろしくお願ひ申し上げます。